
学園黙示録 ～身勝手な願いだけど～

ネメシス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 ～身勝手な願いだけ～

【Nコード】

N8153M

【作者名】

ネメシス

【あらすじ】

<奴ら>に噛まれ<奴ら>と化してしまった俺。

しかし、奇跡か何かかは知らないけど、少しだけ意識が残っていた。途切れ途切れの記憶の中、それでも覚えているあいつとの記憶。最期の願い、もう一度だけでいい、あいつに会いたい…。

(前書き)

ネメシスの短編第二弾です。

学園黙示録、みんなの作品も読んでいたらすっごく面白くて自分でも書いてみたくなり、書いてみた……後悔はしていないと思う。

それでは、拙い作品ではありますがどうぞよろしくお願いします。

――とてつもなく渴く

俺はこの渴きを抑える方法を知っている。

――俺の本能が叫ぶ

その本能に身を任せてしまえばどんなに楽になることだろう。

――血を！肉を！周りの仲間達のように獲物を貪り喰え！

そう、＜奴ら＞の様にその本能の命ずるままに、己にたった一つ残された欲求、食欲を満たすことができたらどんなに幸せであるだろうか。

しかし、奇跡か何かは知らないが、ほんの僅かに残された俺の意識が理性をもって欲求を抑えつける。

この一線を突破しない限り完全に＜奴ら＞の仲間とはならないだろう。

逆に、この最後に残された意識によって作りだしている理性という防衛線が突破されてしまったら……

もう、俺が俺じゃなくなる。

しかし、本能の叫びはまさに悪魔の甘い誘惑の様に、俺に最後の線突破することを強要する。
それに何度も身を委ねてしまいたくなるが、なんとか自分を抑えつける。

……というか

(……なんで俺、こんなに必死に抵抗してんだ？てか俺、どこに向かってるんだ？)

そう、俺は＜奴ら＞になりながらも必死に本能に逆らってまで、一体どこに向けて足を進めているのか。

周りでは＜奴ら＞が本能に従い生徒達を捕食し、新たな仲間を作り出している。

俺を襲わないということは、俺はすでに奴らの仲間として認識されているということなのだろうか。

奴らに認識などできるのかどうかはわからないから何とも言えないが。

(……それにしても)

と、＜奴ら＞が貪り喰っているところを横目でみる。
こうなる前なら絶対に思わなかっただろうに、今となっては……

———オイシソウダナア

一瞬本能に流され一緒に食ろうと立ち止まりそうになるが、
なんとか抑えつけ目をそらし歩みを進めていく。

そこでふと思い出す。

(……ああ、そうだ、あいつに会いたいんだ)

今となってはほとんど残っていない記憶の中、そんな中でも唯一と
いっていい、残っているあいつの記憶、あいつとの記憶。

小さいころからの付き合いであるあいつは、とても綺麗で、とても
優しくて、そしてとても強い。

何度も何度も訓練と称しつつ俺と木刀で打ち合いをした。

……まあ、結局俺は一度たりともあいつに勝つことはなかったが。

俺の振るう木刀はあいつに当たらないのに、あいつの振るう木刀は
すべての的確に俺に当たる。

しかもあいつは完全に手加減していたようだし、ほんと男としては格好つかないことこの上ない。

俺は毎度のことながら長く打ち合えず、ぼろぼろになり地面に寝転がる。

こんな俺なんかとやり合って訓練になるのかと聞いたことはあるが、あいつは俺との打ち合いが楽しいから別に気にしないといった。

……それは俺をいたぶるのを楽しんでいるのかと一瞬身震いがしたのを思い出す。

ぼろぼろで寝転がった俺にあいつは何も言うことなく隣に腰を下ろし、微笑みながら俺の頭をなでる。

それがこそばゆくて、しかし心地よくて……。

そんな一時が、とても幸せに思えた、そんな記憶。

おそらくあいつはこんな状況でも生きているだろう。
あの頃から打ち合ってボロボロにされてきた俺にはわかる、あいつは生きている。

もう、俺はあいつと一緒にいくことはできないけど、それでも最後にあいつの顔を見たい、あいつの声を聞きたい、話ができるかどうかどうかわからないが最後に少しでも話したい。

そんなことを考えていると、俺はいつの間にか昇降口のところまで来ていた。

外を見ると生き残りだろう生徒達がバスに乗り込んでいるところだった。

勘でしかないが、おそらくあいつはあそこにいる、そう思った。

俺はバスを目指し、一步一步と歩いていく。

周りにはあいつらが倒したであろう＜奴ら＞が転がっている。
どうやら段差のあるところは今の俺にはきついらしく何度も転びそうになりながらも何とか転ばないように気をつけながら進んでいく。

ふと、バスのほうを見る。

遠目であっても流石に俺が＜奴ら＞だということはあいつらも分かるだろうから俺を待つはずがない。

もしかしたらもうすでにバスは出てしまったかもしれない。

しかし、見るとバスはまだ発車していなかった。

中から何やら言い争っているような声が聞こえる。

……どうやらこの身体になってから、聴覚は格段に上がっているみたいだ。

少しすると、閉まっていたはずのドアが開き、中から木刀を持った少女が一人降りてきた。

『毒島冴子』

そう、それは俺が探し求めてきた、俺の目的そのもの。

あいつは俺の顔を見ると、いつもの奇麗な顔を歪めて今にも泣きそうな顔になってしまった。

そんな顔も奇麗だと思ってしまう俺は感性がおかしいのだろうか、しかし今となってはすでにそんなものの気にしている余裕はないだろ

う。

俺はあいつのところまで歩みを進める。

あいつはそんな俺に対して木刀を上段に構えて近寄ってきた。

せめて俺がこれ以上醜態をさらさないように、せめて長年付き合ってきた自分が俺を討とうということだろう。

流石に長年の付き合いなだけはある、あいつの考えることが手に取るようにわかった。

（あいつらしいな。ほんと、そういうところはあいつらしいよ）

逆の立場ならおそらく俺もそうするだろう。

そして、もしかしたら俺もそれを望んでここまで来たのかもしれない。

どうせいつか、誰かにやられるのなら自分が一番気の置いている存在に、あいつに、その方が俺の最期としては幸せなのかもしれない。

……でも

俺はあいつの前まで行き、そして止まる。

あいつはく奴ら>と化した俺が自分を襲うでもなくただ止まったこ

とに戸惑ってしまい、いつでも降り降ろせるはずの木刀を振り降ろせないでいる。

「……ぎゅ……ん…」

出せないだろう声、俺はたどどしく言葉を紡いでいき、あいつの名を呼ぶ。

「お、お前、意識があるのか!？」

そんな俺にいつもは見せることのない驚いた様子、これは中々に貴重であるが、時間がない、＜奴ら＞が獲物を求めてどんどん校庭に集まってくる。

「…ご…め……ん……おれ…バ……も…イ……じょ…に…いげ…
ない…」

やはり舌がうまく動かなく、ちゃんと言葉を紡ぐことができない。だが、それでも伝えられないわけじゃない。

あいつは俺の言葉にとうとう目に涙を浮かべて、そしてただじっと聞いている。

あいつに泣いてほしくなかなかったのに、それが俺には本当にうれしかった。

「ザ…え…ご…い…ぎで…おで…の…ぶん…ま…で…い…ギ
…ぬ…い…で…ぐ…れ…」

「……わかった。お前の最期の言葉、確かに受け取った。今まで…
ありがとう。お前のことは……絶対に…忘れない……！」

あいつは上段に構えた木刀に力を込める。

ああ、今度こそ俺はあいつの手によって逝くことができるんだな、
この苦しみから解放されるんだな。

「…あり…が……ど…お……」

その最期の言葉を紡ぎ、俺はゆっくりと目を閉じる。

ああ、本当に俺は最低だな、あいつを泣かせて、そしてあいつの手
で、俺を殺させようとしているんだから。

あいつは約束したことは果たす奴だ、今までだってそうだった。
さっき、俺に忘れないと言った、本当にあいつは忘れないだろう。
俺のことを、俺との思い出を……俺を殺したことを。

本当に俺は最低だ、あんないい女を泣かしたんだから。
でも、あんなに泣くほど、俺を大事に想っていてくれたんだ。

それ知ることができただけでも、俺は本当に幸せだよ。

でも、せめてこんな俺でも最期に願わせてくれ。

あいつが、これからの道程で少しでも幸せを感じてくれることを。
自分勝手とわかっているが、それでも願わせてくれ。

こうして

俺の意識は

あいつの

俺の大好きなあいつの手によって

消えていった

(後書き)

……うん、やはり自分の作品をみんなに見てもらうというのは恥ずかしいもんがありますね、しかも自分で駄文と分かっているだけに何とも…。

本当は、冴子達と主人公を分断させて後々合流させるというかそんな感じにしようとしたのですが、私の思い描いている主人公像じゃ、どうしても途中で死んでしまう。

やっぱり一般人な主人公が黙示録世界で頑張って生きていくというのは難しいものがあるかなあ。

だからと言って、主人公に特殊な設定（主人公強キャラとか）をつけるというのもやはり忌避してしまう。

仮にも普通の世界でいきなり起こったバイオハザードだから、特殊な主人公というのもこわりとして入れたくないというか……そんなこと言っているからいい作品が作れないのかなあ……orz

さて、ここまで私の駄文を読んでくださった方、本当にありがとうございます。

それでは、またいつか、御縁がありましたら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8153m/>

学園黙示録 ～身勝手な願いだけど～

2010年11月22日11時09分発行